

ジェイムズ・ジョイスはジョージ・ムアのタウフニッツ版 『未耕地』をどのように読んだのか

戸 田 勉

抄 録

アイルランド生まれの小説家ジョージ・ムアは、ジェイムズ・ジョイスに大きな影響を与え、二人の作品には多くの共通点が認められる。本稿では、ジョイスがムアの『未耕地』(1903)を酷評した1904年11月の手紙を取り上げ、その内容を再検証することによって、ジョイスとムアの小説家としての姿勢の違いを浮かび上がらせることを目的とする。さらに、先行研究では取り上げられることのなかった手紙の一語に注目し、その解釈を通して当時のジョイスにとって『未耕地』がどのような意味を持っていたか考察する。

キーワード：アイルランド文学、ジェイムズ・ジョイス (James Joyce)、ジョージ・ムア (George Moore)、『未耕地』 (*The Untilled Field*)、『ダブリナーズ』 (*Dubliners*)

1. はじめに

ジェイムズ・ジョイス (1892-1941) とジョージ・ムア (1852-1933) の影響関係やインターテクスチュアリティについては、これまでの多くの研究が積み重ねられてきた。アイルランドに生まれ、カトリックの教育を受けながらも、それを拒絶し、自らにエグザイルの使命を課して祖国を離れた二人の作家の間には多くの共通点がある (McCarthy 99-100、安達 215、田村 71)。また、ジョイスの処女作である短編集『ダブリナーズ』 (*Dubliners*, 1914) には、ムアの短編集『未耕地』 (*The Untilled Field*, 1903) からの影響が随所に見受けられることも指摘されている⁽¹⁾。

当初、ジョイスのムアに対する評価は毀誉褒貶相半ばするものだった。1901年に発表したエッセイ「喧噪の時代」 (“The Day of the Rabblement”) では、ムアの『エステル・ウォーターズ』 (*Esther Water*, 1894) や『虚しき運命』 (*Vain Fortune*, 1891) の独創性を高く評価する一方で、その可能性については「芸術の未来とはまったく関係を持たない」と言い放っている (Joyce, 1966, 71)。この評価は『未耕地』に向けられるとさらに厳しくなり、1904年11月に弟のスタニスロースに宛てた手紙の中では「まったくばかげた作品 (“Damned stupid”)」 (*Letters II* 71)、さらに翌年の5月には同じく弟に書いた手紙では「あの愚かで下手くそな本 (“that silly, wretched book”)」 (*Letters II* 111) とまで酷評している。一方のムアも、1917年に『ダ

ブリナーズ』を読んだときの感想として、「死者たち」(“The Dead”)をある程度評価するものの、ジョイスが「将来傑作と呼べる作品を書く作家にはならないだろう」(Ellmann, 405)と冷ややかな意見を述べている。

このような二人の対立関係を踏まえつつ本稿で再検証したいのは、ジョイスが1904年11月19日に弟に宛てて書いた手紙である。

I have read Moore's 'Untilled Field' in Tauchnitz. Damned stupid. (1) A woman alluded to her husband in the confession-box as 'Ned'. Ned thinks &c! (2) A lady who has been living for three years on the line between Bray and Dublin is told by her husband that there is a meeting in Dublin at which he must be present. She looks up the table to see the hours of the trains. This on DW and WR where the trains go regularly: this after three years. Isn't it rather stupid of Moore. (3) And the punctuation! (4) Madonna!

(*Letters II*, 71)

(以下、下線及び番号はすべて筆者による)

上でも述べたように、ジョイスはこの手紙中でムアの『未耕地』の価値を否定しているが、ここには具体的な作品に対する言及があり、そこから二人の小説に対する姿勢の違いを垣間見ることができる。

ここでジョイスが批判している点は以下の4点である。

- (1) 女性が告解室で夫をファーストネームの“Ned”と呼んでいる点(下線部(1))
- (2) ダブリンに3年も暮らしながら、ブレイ発の鉄道の時刻が頭に入っていない点(下線部(2))
- (3) 句読法(punctuation)の問題(下線部(3))
- (4) Madonnaが何を指すかの問題(下線部(4))

これを具体的な作品と照らし合わせた場合、(1)と(2)が『未耕地』の“The Wild Goose”に関する批判にあたり、(3)の punctuation は作品全体にかかわる問題と考えられる。しかし、(4)の Madonna が、作品のどの部分を指しているかは判然としない。この手紙に関する代表的な論考は、1983年に発表されたパトリック・A・マッカーシー(Patrick A. McCarthy)の“The Moore-Joyce Nexus: An Irish Literary Comedy”であろう。日本では、結城英雄(2012)や金井嘉彦(2016)が『ダブリナーズ』との関連でこの手紙を取り上げている。しかし、不思議なことに、これらの先行研究では下線部の(4)の解釈がまったく示されていない。本稿では、この手紙におけるジョイスのムア批判を具体的に考察し、二人の小説家としての意識の違いを浮かび上がらせてゆく。さらに、下線部(4)“Madonna!”の正体を明らかにすることによって、当時のジョイスにとって『未耕地』がどのような意味を持っていたかについて考察する。

2. 『未耕地』の改訂

本題に入る前に、ここで『未耕地』の改訂の経緯について簡単に説明しておく。この短編集は、当初ゲール語で書かれた短編（英語訳で“The Wedding-Gown” “Almsgiving” “The Clerk’s Quest” となる作品）を1903年に英語に直したものである（安達 165；Frazer 160）。興味深いことに、1903年版には、T・フィッシャー・アンウィン社（T. Fisher Unwin）から出版されたイギリス向けのものドイツのライプツィヒにあるタウフニッツ社（Tauchnitz）が出版したヨーロッパ向けの二種類の版が存在する。タウフニッツ版は *British Authors Series*（所謂「英米文学叢書」）としては発刊されたもので（清水一義、1997、4）、ジョイスが手紙で言及したテキストがこれに当たる。

このタウフニッツ版では、イギリス版に所収されていた “In the Clay” と “The Way Back” が外されている。どちらの物語もロドニーという外国帰りの彫刻家を中心人物としており、T・フィッシャー・アンウィン版では、これらの二作品を冒頭と最後に配置しており、短編集全体に統一感を持たせようとしたムアの意図を読み取ることができる。ところが、タウフニッツ版以降の版では、この二作が抜け、その代わりに “The Patchwork”、“The Wedding Feast”、“The Window” の三作が加えられている。また、掲載の順番にも変更が加えられ、“Exiles” や “Home Sickness” といった「離郷」と「帰郷」をテーマにした作品が最初に並べられている。このタウフニッツ版と同じテキストが、同じ年の1903年にアメリカでJ・B・リピンコット社（J. B. Lippincott）から出版されている。これは、1923年にアメリカで「カラ・エディション（*The Carra Edition*）」という版名で出版されたジョージ・ムア全集の中の作品と同じものである。その後、1914年にロンドンのハイネマン社（Heinemann）からタウフニッツ版と同じ版が出版され、さらに、26年に “The Wild Goose” を改訂した版が世に出る。そして1931年に、T・フィッシャー・アンウィン版（1903年）の “The Clay” と “The Way Back” が統合された “Fugitives” が最後に配置され、決定版が上梓された。

図1 *The Untilled Field* の改訂

	1903年 (T・フィッシャー・ アンウィン版)	1903年 (タウフニッツ版/J・ B・リピンコット版)	1926年改訂	1931年改訂
1	In the Clay	The Exile	The Exile	The Exile
2	Some Parishioners	Home Sickness	Home Sickness	Home Sickness
3	The Exile	Some Parishioners	Some Parishioners	Some Parishioners
4	Home Sickness	Patchwork	Patchwork	Patchwork
5	A Letter to Rome	The Wedding Feast	The Wedding Feast	The Wedding Feast
6	Julia Cahill’s Curse	The Window	The Window	The Window
7	A Play-House in the Waste	A Letter to Rome	A Letter to Rome	A Letter to Rome

8	The Wedding-Gown	A Play-House in the Waste	A Play-House in the Waste	A Play-House in the Waste
9	The Clerk's Quest	Julia Cahill's Curse	Julia Cahill's Curse	Julia Cahill's Curse
10	Almsgiving	The Wedding-Gown	The Wedding-Gown	The Wedding-Gown
11	So On He Fares	The Clerk's Quest	The Clerk's Quest	The Clerk's Quest
12	The Wild Goose	Alms-giving	Alms-giving	Alms-giving
13	The Way Back	So On He Fares	So On He Fares	So On He Fares
14		The Wild Goose	The Wild Goose	The Wild Goose
15				Fugitives

3. 告解室の問題

以上のような改訂の過程を念頭に置いて、まず、手紙の最初の問題——(1) 女性が告解室で夫をファーストネームの“Ned”と呼んでいる点 (“A woman alluded to her husband in the confession-box as ‘Ned’ . Ned thinks &c!”)——について考えてゆきたい。ジョイスがここで言及している作品は“Wild Goose”である。この作品は、ネッド・カーマディというアイルランド人が、イギリス、フランス、アメリカを渡り歩いた後、ジャーナリストとなってアイルランドに戻り、そこで資産家の娘で愛国主義的な女性エレンと出会って結婚するが、カトリックの信仰心の厚いエレンとの溝が深まってゆくという物語である。ある日、エレンは書斎で夫が司祭を批判をする雑誌の出版を計画している証拠を発見し、それを司祭に告白する。ジョイスが問題にしているのは、その告白の場面でエレンが夫を「ネッド」と呼んでいる点である。

She went into the confessionals to confess her sins, and one of the sins she was going to confess was her culpable negligence regarding the application of her money. There were other sins. [……]

"I cannot understand how your husband can be so unwise. I know very little of him, but I did not think he was capable of making so grave a mistake. The country is striving to unite itself, and we have been uniting, and now that we have a united Ireland, or very nearly, it appears that Mr. Carmady has come from America to divide us again. What can he gain by these tactics? If he tells the clergy that the moment Home Rule is granted an anti-religious party will rise up and drive them out of the country, he will set them against Home Rule, and if the clergy are not in favour of Home Rule who, I would ask Mr. Carmady, who will be in favour of it? And I will ask you, my dear child, to ask him—I suggest that you should ask him to what quarter he looks for support."

"Ned and I never talk politics; we used to, but that is a long time ago."

"He will only ruin himself. But I think you said you came to consult me

about something.” (“The Wild Goose” *UF* [Tauchnitz], 272-274)

(以下、*The Untilled Field* からの引用は、*UF* と略記し、“ ” 内に作品名、[] 内に版の名称か改訂年、最後にページ数を記す)

ここには問題が二つ存在する。ひとつは、ジョイスはこの告白中に Ned thinks に相当する表現 (“Ned thinks &c”) 表現があるように手紙で書いているが、実際には、そのような表現はどこにも見当たらないことである。この点についてはマッカーシーも納得できず、Ned thinks に当たる表現は、“Ned and I never talk politics” ではないかと述べている (102)。しかし、厳密に考えた場合、表現が明らかに異なるので、手紙でのジョイスの言及は誤りと見なすべきである。では、なぜジョイスはそのような間違いをしたのだろうか。手紙では「タウフニッツ版でムアの『未耕地』をちょうど読み終えた (“I have read Moore’s ‘Untilled Field’ in Tauchnitz”)」と述べており、読んでから時間があまり経過していないことがわかる。「適切な言葉 (mot juste)」に拘るジョイスが読んだばかりの小説の表現を間違えるとなると、そこには何か別の理由があった可能性も否定できないだろう。その理由については後述する。

もうひとつの問題は、告解室でファーストネームが使われる点である。この場合は、罪の告白というより相談であり、司祭もエレンの夫をミスタ・カーマディーと二回呼んでいるので、このようなケースもあり得るとしてムアを擁護することもできるだろう (McCarthy 102)。しかし、常識的には、司祭は告白の内容を守秘する義務があり、告解者と司祭の関係は匿名化されなければならない (結城、2012、55-56)。したがって、「ネッド」や「ミスタ・カーマディー」という呼びかけは告解室の中で非常に不自然に響く。

しかし、さすがにムアもこの点には無理を感じたようで、1926年の改訂でその設定を大きく修正している。

And the thought sprang suddenly into her mind: Why not consult Father Brennan? ‘He will be hearing confession on Saturday,’ she said. But she could not wait till then and hurried forth right to his house.

‘Father Brennan, I could not wait till Saturday. I had to come to you at once. I am not certain that what I am going to tell you is a sin, but I consider it as part of my confession.’

“The Wild Goose” *UF* [1931]. 242-244

新しい版では、エレンは自分の行動が罪の告白に当たるかどうかよくわからないと考え、教会の告解室に行くのではなく、神父の家に行って相談するという流れに修正されている。

4. 時刻表の問題

次に時刻表の問題について考えてみたい。以下、その場面をタウフニッツ版と改訂版で引用する。

“I have come back to look for some paper,” he said. “It is very annoying. I have lost half the day.” And he went on looking among his papers, and she could see that he suspected nothing. “Do you know when is the next train?”

She looked out the train for him, and she could see that he suspected nothing, and after he had found the papers he wanted they went into the garden. (“The Wild Goose” *UF* [Tauchnitz], 276)

“I have come back to look for some paper,” he said. “It is very annoying. I have lost half the day. Do you know when the next train is?”

She looked out the train for him, and after he had found the papers he wanted they went into the garden. (“The Wild Goose” *UF* [1931], 269)

ジョイスは手紙の中で、エレンがダブリンに三年も住んでいながら、ダブリン行きの時刻表が頭に入っていないのは常識的に考えられないと非難する。これは、リアリズムに徹するジョイスならではの見解だろう。ムアがロンドンからダブリンのイーライ・プレイスに居を移したのは1901年3月であり、この作品の執筆当時（1902年）、まだダブリンに暮らす人間の生活を十分に描けるほど生活に馴染んでいなかったことは想像に難くない。マッカーシーは、この描写について、専業主婦で外に出ることの少なかったエレンが正確な時間を確認しようとしたことは、ごく普通にあり得ることではないかと述べてムアを弁護する（102）。

この場面は、ネッドの机の上に置かれた秘密の出版計画書類をエレンが動かしてしまったため、それを彼に気付かれるのではないかと彼女が緊張するところである。ムアにしてみれば、ネッドの動きから目が離せない状態にいるときに時刻表の確認を頼まれたエレンの追い詰められた状況を演出したかったのであろう。この点は、タウフニッツ版で“she could see that he suspected nothing”が二度繰り返されている事実からも確認できる。ムアはその後の改訂版でこの場面を大きく修正することはなかった。時刻表の問題には、細部に拘るリアリストとしてのジョイスと、読み手を楽しませようとするストーリーテラーとしてのムアの気質の違いが明白に映し出されて興味深い。

5. 句読法について

マッカーシーは、ムアの句読法が「雑（“sloppy”）」であることは認めている（101）。実際には、『未耕地』以前の作品にもこの傾向は顕著に表れている。次の引用は、『虚

しき運命』からのものだが、下線部 “a woman’s life,—” のようにダッシュの前にカンマをつける独特な形が散見される。

My life has been essentially a woman’s life,— suppression of self and monotonous duty, varied by heart-breaking misfortune. I married when I was young; before I had even begun to think about life I found—But why distress these hours with painful memories? (*Vain Fortune*, 287)

次の例はコロンの後につけるダッシュ（下線部）で、会話文の前に用いられる。これは、『エスター・ウオーターズ』でも頻繁に見られる用法である。

They were on their way to the station, and they walked some time without speaking.

Then, speaking suddenly and gravely as if prompted by some deep instinct, Ellen said: —

"But if you fail, Ned, you will be an outcast in Ireland, and if that happens you will go away, and I shall never see you again."

(“The Wild Goose” *UF* [Tauchnitz], 282)

次の用法はダッシュの連続である（下線部）。しかし、改訂版ではこの連続は修正されている。

“I know that Peter has been very good, that he has cared for me this long while… If he wishes to make me his wife— —”

(“Some Parishoners” *UF* [Tauchnitz], 71)

このようなムアの句読法は、最終的な改訂版ではほとんど姿を消すが、それでもダッシュの使い方には、独特な傾向が残っている（下線部）。

So Mike had come back from King’s County, and had built himself a house, had married—here were children for sure running about; while he, Bryden, had gone to America, but he had comeback; perhaps he, too, would build a house in Duncannon, and—

His reverie was suddenly interrupted by the carman.

(“Homesickness” *UF* [1931], 34)

以上のように、ムアは、句読点、特にダッシュの用法に特徴のある作家であることがわかるだろう。リンダ・ベネット (Linda Bennet) は、ムアの技法が19世紀的な枠

から抜け出せていない点を指摘し、そこにスタイリストとしてのジョイスとの相違を強調するが(289-90)、それは句読法からも読み取ることができる。

6. “Madonna!” について

前述したように、この“Madonna!”に関する先行研究は見当たらない。ジョイスの手紙におけるムアの批判をひとつずつ弁護してきたマッカーシーでさえ、この語の解釈を避けている(101-102)。ジョイスとムアの関係をアイルランド文学ルネッサンスの観点から読み解いている結城も、この手紙を検証してはいるが、“Madonna!”については触れていない(2012, 55-56)。

この“Madonna!”の問題を論じるためには、この語の定義から始める必要があるだろう。OED第二版によれば、Madonnaの定義は、1. a. As an Italian form of address or title. *Obs.* b. An Italian lady. *Obs.* 2. a. An Italian designation of the Virgin Mary; usually with *the*; occas. used vocatively. b. A picture or statue (esp. Italian) of the Virgin Mary. とある。『未耕地』の内容に照らし合わせた場合、この語義は2. bのA picture or statue (esp. Italian) of the Virgin Mary、つまり、「聖母マリア像」と考えるのが適切だろう。

『未耕地』において、マリア像が登場する物語は二作あり、ひとつは“The Window”の中のステンドグラスに描かれた聖母の戴冠の絵柄で、もうひとつは“In the Clay”の中の聖母子像のマリア像である。“The Window”では、教区の教会の修復のために寄付をする女性が自分の希望通りの絵柄のステンドグラス——キリストが聖母マリアに戴冠している構図——を注文する物語である。しかし、この物語のマリア像に対して、ジョイスが手紙の中で、ムアの句読法を批判したように感嘆符までつけて(“And the punctuation!”)、怒りあるいは嘲笑を表したとは考えにくい。一方の“In the Clay”は、教会に飾る聖母子像の製作を神父から依頼された彫刻家が、そのモデルとして16歳の娘を選び、彼女をヌードモデルにして像を完成させるという物語である。とすれば、ジョイスがどちらのマリア像に対して“Madonna!”を使ったかは自明である。

What he wanted her to do was to sit for the nude, and he could not help trying to persuade her, though he did not believe for a moment that he would succeed. He took her to the museum and he showed her the nude, and told her how great ladies sat for painters in the old times. He prepared the way very carefully, and when the bust was finished he told her suddenly that he must go to a country where he could get models. He could see she was disappointed at losing him, and he asked her if she would sit.

"You don't want a nude model for Our Blessed Lady. Do you?"

(“In the Clay” UF [1903], 15)

ムアにしてみれば、ヌードに対して寛容だったパリの画壇の感覚があったのかもしれないが、ここで、若い娘が "You don't want a nude model for Our Blessed Lady. Do you?" (下線部) と大人の男性に向かって言うのは、当時としてはかなりセンセーショナルだったはずである。この物語が1903年のタウフニッツ版以降削除されている理由がこのような物語の展開にあることは疑いないだろう。しかし、ここでひとつの大きな問題が残る。前述したようにタウフニッツ版にこの "In the Clay" が収録されていなかったのである。とすれば、ジョイスはそれをどこで読んだのだろうか。

ジョイスは問題となる1904年11月19日付の手紙の中で、タウフニッツ版で読んだと書いている ("I have read Moore's 'Untiled Field' in Tauchnitz."). しかし、だからと言って、1903年のT・フィッシャー・アンウィン版を読んでいないと断言することはできない。1901年に発表された「喧噪の時代」(Joyce, 1901, 71) では、ジョイスがムアの作品を強く意識していたことは明らかである。また、弟のスタニスロスは『兄の番人』(*My Brother's Keeper*, 1958) の中で、兄のジェイムズは大学時代ナショナルライブラリーでムアの本を読み漁っていたと語っている (112)。とするならば、ジョイスが1903年に出版されたオリジナル版をすでにダブリン時代に読んでいた可能性は高いはずである。また、ムアの「ホームシックネス」("Home Sickness") とジョイスの「エブリン」("Eveline") のテキストの類似性 (West 213) から考えた場合、「エヴリン」が『アイリッシュ・ホームステッド』(*Irish Homestead*) に掲載されたのが1904年9月10日であるので、ジョイスが大陸に渡って (10月) タウフニッツ版を手に入れ、ムアの「ホームシックネス」から影響を受けたことは時間的にあり得ない。この点について、マイケル・ウェスト (Michael West) は、ジョイスがムアの「ホームシックネス」を1902年の『ポール・モール』(*Paul Mall*) 誌に発表された段階で読んだのではないかという可能性を示唆している (214)。もし、そのような大陸に渡る前の影響関係を考慮するのであれば、1903年のT・フィッシャー・アンウィン版をダブリン時代に読んでいた可能性も否定することはできないだろう。

ジョイスが手紙の中で敢えて「タウフニッツ版」といって出版社に言及している点にも不自然さが残る。もし『未耕地』に初めて出会ったのであれば、わざわざタウフニッツ版という断り書きも必要ないはずである。したがって、この段階でジョイスはすでにT・フィッシャー・アンウィン版の存在を知っていたと仮定することができるだろう。さらに、告解室で "Ned thinks" という表現が使われているとジョイスがクレームを付けた点に関しても、このようなフレーズはオリジナル版にもタウフニッツ版にもないので、この手紙を書いたときに、ジョイス自身の記憶が混乱していたとも考えられるのではないだろうか。この手紙が書かれた1904年11月19日はジョイスがノラと駆け落ちをして大陸に渡った1か月後である。二人は10月11日にチューリッヒに渡るが、そこで当てにしていたベルリッツスクールの職がなく、急遽ポーラに移動した時期と重なる。そのような落ち着かない時期に、仮にタウフニッツ版を手に入

れたとしても、果たしてどこまで丁寧に読めたかどうか強い疑問が残る。“Madonna!”という感情的な言葉は、かつてオリジナル版で“In the Clay”を読んでいたときの強い印象から漏れた表現とも考えられるのである。

7. 終わりに

最後に、ジョイスが1920年にトリエステの書斎に残してきた本のリストについて触れたい。

*Moore, George, *Celibates: Three Short Stories* (London, 1895) (*Letters*, II. 74-75)

----, *Evelyn Innes* (London: T. Fisher Unwin, 1898)

Another copy (Leipzig: Tauchnitz, 1901)

----, *Hail and Farewell: Ave, Salve, Vale* (Leipzig: Tauchnitz, 1912, 1912, 1914). Each is stamped ‘J.J.’

*----, *The Lake* (London: Heinemann, 1905) (*Letters*, II. 129, 156, 162-3)

----, *Lewis Seymour and Some Women* (Paris: Louis Conard, 1917)

----, *Memoirs of my Dead Life* (Leipzig: Tauchnitz, 1906), Signed by George Constantini, 1911.

----, *Muslin* (London: Heinemann, 1915) Stamped ‘J.J.’

----, *Sister Teresa* (London: T. Fisher Unwin, n.d.)

----, *Spring Days* (Leipzig: Tauchnitz, 1912)

----, *The Untilled Field* (Leipzig: Tauchnitz, 1903) Stamped ‘J.J.’ (*Letters*, II. 71, 111)

*----, *The Vain Fortune*, new edition (London: Walter Scott, 1885) Signed ‘Jas. A. Joyce March 1901’ (Slocum and Cahoon, p.177) (*Letters*, II. 74-75)

(Ellmann, 1972, 120)

ここでエルマンは、トリエステ時代に所有していたか、読んだ可能性のあるものにアスタリスクを付け、その根拠となる資料をカッコ内で示している。まず、ここからわかることは、ムアの作品数の多さとマイナーな作品にまでジョイスが目を配っている点である（金井、2016、51）。さらに、『エスター・ウォーターズ』や『ある青年の告白』（*Confessions of a Young Man*, 1888）といった、ダブリン時代にジョイスが間違いなく影響を受けた作品が抜けている点である。また、リストの2番目にある『イヴリン・イニス』は、ジョイスがイタリア語に翻訳しようとした小説であるが、“*Evelyn Innes* (London: T. Fisher Unwin, 1898) Another copy (Leipzig: Tauchnitz, 1901)”と表記され、ジョイスがタウフニッツ社版とT・フィッシャー・アンウィン版の両方を所有していたことがわかる。このようなジョイスのムア・コレクションを見る限り、『未耕地』のオリジナル版が1903年にT・フィッシャー・アンウィ

ン社から出版されていたにもかかわらず、大陸に渡った1904年の11月までそれを手に取らなかったとは想像しにくい。

1904年の秋、ジョイスは『アイリッシュ・ホームステッド』に「姉妹」(“The Sisters”)、「エヴリン」、「レースの後に」(“After the Race”)を発表し、その後の10か月で『ダブリナーズ』の残りの7つの短編を書き上げようとする小説家としての出発点に立っていた。その構想の源泉として『未耕地』は欠かせないものだったことは疑いない。ジョイスが大陸に渡って最初に手に入れた『未耕地』は、彼が初めて手にしたものというよりは、ダブリン時代にすでに触れ、その価値を知った上で、これから始まる創作のモデルとして再び手に入れたものと考えられるのである。

付記 本稿は日本ジェイムズ・ジョイス協会第31回研究大会(2019年6月8日、同志社大学)におけるシンポジウム「Joyce in Context: ムアの地層」の「『未耕地』と『ダブリナーズ』再検証」の発表原稿に加筆修正をしたものである。

注

(1) ムアとジョイスの関係に関する批評の歴史的な概括は、田村章の「ジョージ・ムアからジェイムズ・ジョイスへ——視覚芸術とのかかわりを中心に——」(71-72)にまとめられている。安達正は『ジョージ・ムア評伝——芸術に捧げた生涯』の「ムアとジョイス」というセクションの中で伝記的な事実を踏まえながら、二人の関係を論じている。また、『未耕地』と『ダブリナーズ』のテキスト上の関連については、Michael West. “George Moore and Hermeneutics of Joyce’s *Dubliners*.” *Harvard Library Bulletin*. 26 (1978) に詳しく論じられている。日本では、金井嘉彦が『ジョイスの罨』(2016)の中で『未耕地』と『ダブリナーズ』の接点を丁寧に解説している。

引用・参考文献

Bennet, Linda. “George Moore and James Joyce: Story-teller versus Stylist” *An Irish Quarterly Review*. Vol. 66. No. 264 (Winter, 1977) (275-291)

Ellmann, Richard. *The Consciousness of James Joyce*. London: Faber and Faber, 1977.

---. *James Joyce*. New and Revised Edition. Oxford: OUP, 1982.

Frazer, Adrian. *George Moore, 1852-1933*. New Haven: Yale UP, 2000.

Joyce, James. *Dubliners*. 1914. Ed. Terence Brown. London: Penguin Books, 1992.

---. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. 1916. Ed. Seamus Deane. London: Penguin Books.1992.

---. “The Day of the Rabblement.” 1901. *The Critical Writings of James Joyce*. Ed. Ellsworth Mason and Richard Ellmann. New York: The Viking Press, 1966. 68-72.

---. *Letters of James Joyce*. Vol. II. Ed. Stuart Gilbert. New York: Viking Press,

- 1966.
- Joyce, Stanislaus. *My Brother's Keeper*. 1958. Ed. Richard Ellmann. London: Faber and Faber, 1982.
- McCarthy, Patrick A. "The Moore-Joyce Nexus: An Irish Literary Comedy." *George Moore in Perspective*. Ed. Janet Egleson Dunnleavy. Totowa: Barnes and Noble Books, 1983.
- Moore, George. *The Untilled Field*. London: T. Fisher Unwin.1903.
- . *The Collection of British Authors: The Untilled Field*. Leipzig: Barnard Tauchnitz, 1903.
- . *The Collected Works of George Moore*. Vol. VIII. *The Untilled Field & The Lake*. Cara Edition. New York: Boni and Liveright, Inc, 1923. Kyoto: Rinsen Books, 1983.
- . *The Untilled Field*. 1931. Gerrards Cross: Colin Smythe, 1976.
- . *The Collected Works of George Moore*. Vol. IX. *Confession of a Young Man*. Cara Edition. New York: Boni and Liveright, Inc, 1923. Kyoto: Rinsen Books, 1983.
- . *Vain Fortune*. London: Henry and Co., 1991.
- Marcus, Phillip L. "George Moore's Dublin 'Epiphanies' and Joyce." *James Joyce Quarterly* Vol.5. No.2. (Winter 1968): 157-161.
- Owens, Graham (ed.). *George Moore's Mind and Art*. Oliver and Boyd: Edinburgh, 1968.
- Shovlin, Frank. *Journey Westward: Joyce, Dubliners and the Literary Revival*. Liverpool: Liverpool UP, 2012.
- West, Michael. "George Moore and Hermeneutics of Joyce's *Dubliners*." *Harvard Library Bulletin*. 26(1978): 212-235.
- 安達正 『ジョージ・ムア評伝——芸術に捧げた生涯』東京 鳳書房 2001.
- 金井嘉彦・吉川信編著 『ジョイスの罫——「ダブリナーズ」に嵌る方法』言叢社 2016.
- 金井嘉彦 「ジョイスとムアのインターテキストュアリティ（1）：二つの『西への旅』」言語文化 52巻 一橋大学 2016.
- . 「ジョイスとムアのインターテキストュアリティ（2）：「死者たち」と『虚しき運命』のエゴイズム」言語文化 55巻 一橋大学 2019.
- 清水重夫 シンポジウム報告「ジョイスとジョージ・ムア」Joycean Japan No.18. 日本ジェイムズ・ジョイス協会 2007.
- 清水一義 「『英米作家叢書』歩み——タウフニッツ社の歴史とともに」（その1-6）愛知大学文学論叢 144-149 愛知大学文学会編 1997-2002.
- 高倉章男 「ケルト神話と想像力の復権——ジョージ・ムアの小説『平和を探る言

- 葉たち — 20世紀イギリス小説にみる戦争の表象』鷹書房・弓プレス 2014.
- . 「第4章ジョージ・ムア — 唯美主義小説の開花 — ダブリンでの十年」『文学都市ダブリン — ゆかりの文学者たち』木村正俊編 春風社 2017.
- 田村章 「ジョージ・ムアからジェイムズ・ジョイスへ — 視覚芸術とのかかわりを中心に —」金城学院大学論集 人文科学編 第9巻 第2号 2013. (71-83)
- 結城英雄 「アイルランド文学ルネサンスとジェイムズ・ジョイス (2) — ジョージ・ムアとジェイムズ・ジョイス —」法政大学文学部紀要 第65号 2012 (49-62).
- . 「ジョージ・ムアの『一青年の告白』における時代の文脈」『一九世紀「英国」小説の展開』海老根宏・高橋和久編著 松柏社 2014.

(2020年1月7日 受理)

